朝鮮民族の発祥の地
白頭の革命伝統が築かれた革命の聖山
山岳美と自然の景観がすぐれた朝鮮の名山



朝鮮の聖山

朝鮮民主主義人民共和国· 外国文出版社
チュチェ110(2021)



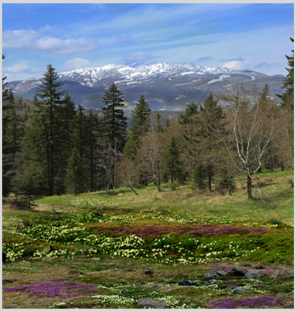
朝鮮の 聖山

朝鮮民主主義人民共和国・外国文出版社
チュチェ110(2021)

目　次







はじめに

白頭（ペクトゥ）山は朝鮮半島を縦断する白頭大山脈の起点にそびえる海抜2750メートルの高山であり、頂上にあるカルデラ湖——天池は鴨緑（アムノク）江と豆満（トゥマン）江の水源である。

白頭山は朝鮮民族の歴史と不可分に結びついており、朝鮮の歴代の国々のほとんどは白頭山をその領地とし、それぞれ自国の聖山として崇めてきた。

白頭山は朝鮮革命の聖山、現代朝鮮の聖山である。

日本の植民地支配を覆し、5000年の民族の歴史を輝かせる陽光は白頭山から差し始めた。

一つの国家・民族にとって、いつの時代であれ、一つの山が持つ意味は別して深くはないが、朝鮮民族の歴史において白頭山の占めた意義は非常に大きい。

本書は、朝鮮民族が有史以来聖山として崇めてきた白頭山の実像を、歴史的、地理的、時代的に叙述し、外国の読者諸賢が朝鮮をより深く知る一つの手がかりとして利用されることを期待して出版される運びになった。





祖宗の山

白頭山は、地理的には領土の起点をなし、歴史的には長年の昔から形づくられ固まった民族の精神と伝統がこもるとして崇められている祖宗の山である。

白頭の大幹

朝鮮は山の多い国であるが、それらの山々は、白頭山を起点として一つの地脈をなし、さまざまの山脈が連なって朝鮮の南端まで伸びている。つまり、白頭山からずっと南に伸び、智異（チリ）山脈の端鳩在（クジェ）峰に至るまで一続きをなした白頭大山脈が朝鮮半島を縦断しているのである。全長1470キロ（3670朝鮮里――10朝鮮里は日本の1里）の白頭大山脈の平均海抜は1170メートルである。

朝鮮では1769年、「サンジャ分水嶺」という原理に基づいて、諸山脈を体系化した「白頭大幹」と名づけられた山脈の体系が確立されている。その原理は「山は川を分かち、水は山を越えることができない」という自然の法則を一般化したもので、山は川の流れを支配し、川は谷間から始まるという意味である。

この原理に基づいて編纂された朝鮮中世の地理書『山経表』（18世紀末～19世紀初め、白頭山を中心にして四方に伸びた朝鮮の山脈の分布と峰々を表示した図表）には、大きな山脈は大幹、基本をなす山脈は正脈、そこから分かれ出た山脈は支脈と記されている。

その「白頭大幹」条には、白頭山から摩天嶺（マチョン）山脈、赴戦嶺（プジョン）山脈、狼林（ランリム）山脈、太白（テベク）山脈などへ伸びてそびえる大きな山や

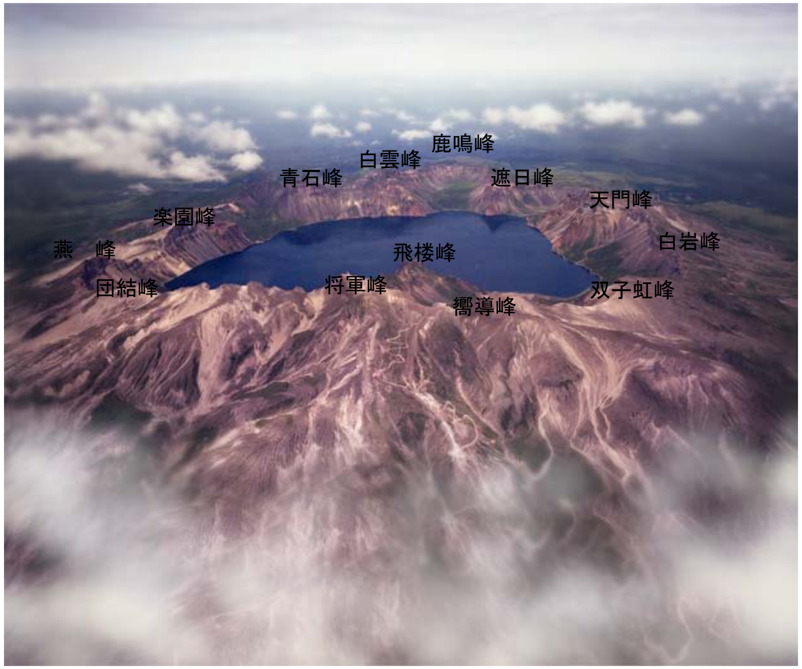


高い峰に関する詳細な解説がついている。

（以上に述べた資料は今日、人工衛星の情報と一致している）

白頭山は、朝鮮の両江道三池淵市と中国の間にそびえている。13回にわたる火山の噴出と共に変化していく中で、極めて特異な自然環境が形づくられた白頭山地区は、下部原生代から新生代に至るまでに幾つもの世代の地層が形成された。

白頭山頂は海抜2000メートル以上の峰々が60度を越える急傾斜をなして天池を取り巻いている。さまざまの形状と高さ



白頭山の主峰

を持つそれらの峰は互いに連なり合い、遠くから眺めるとゆるやかに伸びた屋根のように思えるが、近くで見ると、高い絶壁が並び立つ険しい峰々からなっていることが分かる。

天池を取り巻く峰々のうち海抜2600メートル以上のものは16、山頂の最も低い鞍部からの高さが20メートルを超える峰は200余にのぼる。

白頭山の気候は典型的な高山気候で、朝鮮国内では冬の気温が最も低く、天候の変化が非常に激しい地域である。年中の日照時間は2317.6時間にすぎないが、紫外線の効果が大きくて、絶対的な気温は高くない。夏、白頭山に登ると、陽光は格別に熱く感じられ、植物の葉や花の色は濃く、鮮やかである。

白頭山の最低気温は－47.5℃で、－30℃より低い日は年に58日前後である。白頭山一帯には天池のほか、温泉や滝、泉も多い。

世界に火山や湖は少なくないが、白頭山のように高い山の頂に、天池のような広く深いカルデラ湖を持つ山は希である。水面が海抜2190メートルの天池は、上空から見下ろすと、噴火口の形態が朝鮮の国花モンラン（オオヤマレンゲ）を思わせ、天池の水面は人間の心臓を思わせるハート形である。

1981年6月中旬、天池の中心部に大きな竜巻が生じ、高さ数十メートルもの水柱が200メートルほど動くのが見られ

た。その後、このような現象は幾たびか見られた。昔、ここで竜巻を目撃した人たちは、これは竜の昇天だとして、天池を竜潭と呼んだ。天池の最深は384メートル、平均の深さは213.3メートル、周は1万4400メートルである。

白頭山という名が普遍化したのは、7世紀の後期からである。後に一部で使われた長白山という名は、現在の中国東北部に伸びた山脈を指したもので、山そのものは白頭山と呼び続けられた。

先述したように白頭山は、1470キロもの大山脈の起点に位置して、朝鮮半島の単一の地体構造を形づくっているのである。

白頭大山脈の尾根に沿って並ぶ峰々の標高は概して1000メートルを超えるが、1500メートル以上のものがほとんどである。この場合、北から南へ進むにつれて、山の高さは次第に低くなっている。朝鮮の地形はこのことから見ても推察できるが、白頭大山脈を軸にして、北部と東部は高く、南部と西南部は低くなっている。

17世紀初め朝鮮の実学者李睟光（リスグァン）は、その著『芝峯類説』に、朝鮮のすべての山はみな白頭山に始まり、済州（チェジュ）島の漢拏（ハンナ）山も白頭大山脈に属すると強調している。

このように、朝鮮民族が古くから聖山と崇めてきた白頭山は、朝鮮のすべての山脈が根を下ろした山である。



民族の崇拝の対象

民族史の発祥の地

5000年前の檀君（タングン）朝鮮の建国以来、朝鮮民族によって建てられた国々のほとんどは白頭山に依拠して国づくりを行っている。こうして朝鮮民族は、白頭山を自分たちの魂がこもる聖山、国を守護する偉大な山だと見なしてきたのである。

栄枯盛衰の多難な道を歩んできた悠久な朝鮮民族の歴史を振り返ってみると、最初に「朝鮮」という国号を持った檀君朝鮮以来、高句麗（コグリョ）、渤海（パルヘ）、高麗（コリョ）、朝鮮封建王朝など、朝鮮民族の正統諸国家は、いずれも、白頭山を含む領域に国を建て、単一民族としての歴史と文化を創造してきた。

白頭山は前30世紀初めの檀君朝鮮の建国以来、古朝鮮に属し、古朝鮮人の生活領域にあった。

檀君朝鮮は建国初期に白頭山一帯の住民と諸小国を抱擁して侯国とし、領土を広げていった。そこには濊（イエ）、貊（メク）、扶余（プヨ）、句麗（クリョ）、沃沮（オクチョ）など朝鮮古代の住民たちが建てた小国や住民集団などが属していた。

中国の古い史書には、「濊と沃沮、句麗はみな朝鮮の領域

だった」と記されているが、これは上記の事実を認めたものである。

朝鮮の古い史書にも「（檀君が）朝鮮の領域に依拠して王になったのであるから、尸羅（シラ）、高礼（コレ）、南北沃沮、東北扶余、濊と貊がすべて檀君の統治を受けた」としている。

白頭山一帯に見られる住居址、支石墓、積石墓、室墓など当時の遺跡や遺物を通してみても、白頭山は人類文明の初期から朝鮮民族の生活領域にあった山であることが分かるのである。

白頭山一帯が古代朝鮮人によって開拓された初期から、朝鮮民族は白頭山を朝鮮のシンボルとして崇めてきた。彼らは檀君を崇拝することに劣らず白頭山を崇拝してやまなかった。そのことを見せているのが檀君神話である。

天帝桓仁（ファンイン）の子桓雄（ファンウン）が父から天符印3個を授けられ、臣下たちを従えて太白山（白頭山）頂の神檀樹の下へ降りた。彼は360余の事柄を主管して人間の世を治め、教化した。桓雄は檀君の父である。

もちろん神話そのものは虚構であるが、神話を通して当時の人々の生活や考え方、志向などを推察することが出来る。さらにそこから建国の始祖による国家の成立という出来事は天に通ずる高山、崇厳にして神秘な白頭山の如き霊山とともに始まるとみなした朝鮮民族の観念をうかがい知ることが出

来るのである。

檀君朝鮮を継承した後朝鮮時代にも、白頭山は依然として朝鮮民族の生活領域にあり、民族の崇拝心にも変化はなかった。

千数百年間続いた檀君朝鮮は前2000年紀中葉に奴隷制に抗する人民大衆の闘いと諸侯国の分立傾向によって第47代王のときに後朝鮮王朝にとって代わられた。後朝鮮も檀君王朝の後裔によって建てられた国である。その頃も白頭山の一帯には朝鮮民族の古代国家である扶余、句麗、沃沮などの国家が存在していた。

これらの国はすべて檀君朝鮮の元侯国であり、それらの住民もすべて血統を同じくする同胞で、白頭山に対する崇拝心は強かった。

白頭山への崇拝心は、朝鮮民族の歴史上最も強大であった高句麗時代に至り一層強まった。

前277年、東明王(トンミョン)（高朱蒙(コジュモン)）が建てた高句麗（前277～668）は、朝鮮民族の最初の封建国家であった。高句麗は句麗を引き継いだ国で、その行政区域には白頭山一帯が含まれていた。

高句麗の建国神話『東明王伝説』で、高朱蒙の出生と関連した太白山の南側に流れる優渤水の一帯は白頭山の一帯である。

高句麗においても、朝鮮民族は白頭山の崇拝を始祖王の崇拝と結びつけ、高朱蒙を檀君の子孫と称することで、高句麗が檀君朝鮮の継承国であることを明らかにした。高句麗は、檀君朝鮮の版図内にあった同族の国々を統合して強国を作り上げることを国策としてそれを実現し、東方の強国になった。

白頭山に対する高句麗人の崇拝心は全民族的な感情となり、国策となるに及び、白頭山を神聖視し、そのための宗教行事が毎年行われるようになった。

そのことは、1956年、白頭山天池の北側にある月(タル)門の辺りで発見された100枚余りの高句麗様式の瓦を通しても推察できる。これらの瓦は、そこにあった祠堂の屋根瓦であり、祠堂は白頭山を祀る建物であった。

白頭山一帯を中心に698年に建てられた渤海（698～928）も、白頭山を民族発祥の地、祖宗の山として崇めていた朝鮮民族の伝統を継いだ国である。

ついで朝鮮半島に建てられた高麗（918～1392）と朝鮮封建王朝（1392～1910）の時代においても、白頭山を崇拝する意識と民族的な感情に変化はなかった。

高麗時代の人たちも白頭山が王朝の発祥の地としてのみならず、国と民族を守護する聖山として崇拝した。彼らは、白頭山の山神を高麗王朝と国を守る守護神として崇め、盛大な

祭祀を国の名で行った。朝鮮封建王朝においても事情に変わりはなかった。

次に重要なことは、朝鮮民族の白頭山を守る戦いである。

12世紀初めの高麗の名将尹瓘（ユングァン）が指揮する高麗軍の東北遠征は、白頭山麓で進められた重要な戦いで、民族の聖山を守り、国家的な支配を確保するための愛国的な壮挙であった。

朝鮮封建王朝時代における愛国的名将金宗瑞（キムジョンソ）や南怡（ナムイ）らの白頭山地域における軍事活動も、白頭山とその一帯を守ることを願う朝鮮民族の意志に根ざしたものだと言える。

このように朝鮮の名山白頭山は、朝鮮民族史の発祥の地として民族の崇拝を受けてきた聖山である。

民族の魂が宿る山

白頭山は朝鮮民族の魂が宿る山である。

朝鮮民族は昔も今も民族的自尊心の強い民族である。そのことは、朝鮮民族が5000年の長きにわたり国権を守り続けたことをもってしても確言しうるのである。

その英知ある自尊心の強い朝鮮民族が近代に至り、国力が衰えて列強の籠絡物と化し、遂には日本に国を奪われるという悲惨な境遇に陥った。

19世紀中葉の明治維新により開化の道に入った日本は、欧米諸国の後ろ盾で大陸侵略の野望を露わにした。

日本は16世紀の末、数十万の兵力をもって朝鮮に攻め入り、全土を蹂躙したあげく惨敗して駆逐される前例があったが、この19世紀末と20世紀初め、日清・日露戦争を起こし朝鮮の占領に乗り出した。

ところが、朝鮮の封建支配層は天下泰平を謳歌して国防力の強化には一顧だにせず腐敗しきっていた。そんな時、欧米諸国が砲艦外交をもって開港を迫るや、国是の鎖国政策を放棄することで、国土を外国勢力の利権争いの場にならしめ、あげくの果てに2000万の朝鮮民族は、日本の植民地支配下に呻吟する亡国の民に化した。国権を喪失した民衆は歯ぎしりした。

朝鮮民族の言語も姓名も奪い、民家に押し入って真鍮の食器まで強奪する日本の暴虐な行為に、朝鮮人はさながら生き地獄にあえぐ身になった。

「…日本は、すべての新しい発明と純然たるアジア式拷問を結び付けた前代未聞の野獣性をもって朝鮮を略奪しているが、朝鮮を引き続き略奪すべく奔走するであろう」としたレーニンの指摘はまったく当を得た正確なものだった。

当時、朝鮮人たちは、民族の魂が宿る白頭山から国と民族を救う偉人が出現することを祈願した。

朝鮮を占領した日本の官憲は、朝鮮民族のこうした精神の抹殺をはかって策動の限りを尽くし、白頭山に偉人が出現す

るのを防ぐとして、山の頂上に鉄のくいを打ち込もうとさえした。

ところが、白頭山を崇める朝鮮民族の感情は、日本の支配下で一層強烈になった。そのことを立証する資料や遺物などが発見されて、人々の関心を引いている。

白頭山の天池のほとりに竜神碑閣という銘入りの碑石が立っている。

日本の侵略が露骨になっていた20世紀初めに立てられたもので、高さ1メートル、上部の幅44センチ、下部の幅58センチ、厚さ10～11センチの碑には漢字29字が刻まれている。

白頭山の火山岩を手入れして立てたこの碑は、100余年にわたる白頭山の風雪にさらされて風化されてはいたが、文字はきれいに残っていた。その意味は、天仏教（白頭山を崇拝する民族宗教）徒たちが、白頭山を守る天池の竜神に、朝鮮民族を永遠に安らかに暮らせるようにしていただきたいと祈願したものだった。

この碑は今、朝鮮民主主義人民共和国国宝遺跡第195号に登録され、天池をはっきり見下ろせる将軍峰（チャングン）と嚮導峰（ヒャンド）の間の高みに移されている。

20世紀に入ってからも、白頭山を崇める朝鮮民族の精神は変わらなかった。



白頭山で発掘された昔の碑石
『大太白　大澤守　龍神碑閣』

1920年代末、白頭山を崇拝していた一朝鮮人が白頭山に登った後、その書にこう記している。

「白頭山は朝鮮のαでありωだ。朝鮮はどこで生まれたのか。白頭山ではないか。白頭山は朝鮮という木の根であり、白頭山は朝鮮という形象の鏡だ。

朝鮮のために何かをしようとしても白頭山から始めるべきであり、朝鮮を知ろうとしても白頭山に照らしてみるべきである。天下の名山であり、東方の霊地である白頭山は、この国のすべての山の祖宗であり、根本である。

ああ、白頭山。白頭山こそ朝鮮の一切の集約的表現であり、

朝鮮最高の総括的な価値であり、朝鮮独特の絶対的な精神だ」

同じ頃、白頭山に登り、天池を上から眺めて興奮したある歴史家は、次のように書いている。

「檀君も白頭山にて現れ、東明も白頭山にて現れた。これらの傑出した偉人が白頭山に出現したのは大変な出来事だった。しかしこの祖宗の山白頭山において、今後特出した名人

が生まれないと誰が言えようか。

こうして見ると、檀君と東明が白頭山にて現れたのは九牛の一毛にすぎない」

この文を今日の時点で吟味すると、それは絶世の偉人金日成（キムイルソン）同志と金正日（キムジョンイル）同志の出現を予言したものだと言えよう。





革命の聖山

　白頭山には、朝鮮人民の栄えある抗日武装闘争の歴史が宿っており、ここで朝鮮革命の不朽の至宝である革命伝統が形づくられた。白頭山が革命の聖山として崇められているゆえんである。

白頭山一帯が革命闘争の中心地帯として定着してから朝鮮の抗日武装闘争は、民族の解放と社会的進歩を目指す朝鮮人民の闘いを導く主流となった。これは、朝鮮の独立を目指して闘うことは、朝鮮の革命家の神聖な義務であり、自主的な権利であるとする金日成同志の確固とした信念と気概、献身によってもたらされたのである。

万景台（マンギョンデ）の貧しい草葺きの家に生まれ、10代の年で早くも日本帝国主義侵略者を打倒して祖国の独立を遂げずにはおかないと固く決心した金日成同志は実に、朝鮮人民が国の5000年の史上初めて迎え、高く戴いた偉人であった。

この世に人民大衆をしのぐ全知全能の存在はない、人民に依拠し、人民を呼び起こして、人民自らの力により国の独立を遂げなければならないという金日成同志の思想と民族愛に共感して、人民は決起した。

金日成同志は人民の息子や娘を結集して抗日遊撃隊を組み、白頭山地区を中心にして、抗日大戦を指揮した。

どの兵書にもない戦略・戦法を駆使して、「猛虎の子」を自称し、誇り高ぶる100万の関東軍を翻弄する金日成同志。その名を聞いただけでも、日本軍は恐れおののいた。

このように、祖国の解放、民族の解放を目指す抗日武装闘争は白頭山を中心にして展開されたのである。

抗日武装闘争指導の中心拠点

1930年代後半期から1940年代前半期まで白頭山は、抗日武装闘争を中心とする全般的朝鮮革命の中心の指導拠点としての役割を果たした。

白頭山が全般的朝鮮革命を指導する中心拠点になりえたのはどうした理由によるものだったろうか。

それは第1に、1930年代の後半期にかもされた主体的ならびに客観的な情勢の必要に根ざしていた。

当時、朝鮮人民の抗日武装闘争は全般的朝鮮革命の主流をなし、金日成同志の指導の下で全盛期を迎えていた。

中日戦争（1937年7月7日）を引き起こした日本は、「銃後の安全」「軍用物資の補給」の名の下に、朝鮮人民への弾圧と物資の略奪に狂奔し、その反作用として朝鮮の民心は、朝鮮人民革命軍にいよいよ強く引きつけられていった。

朝鮮の多くの青壮年が朝鮮人民革命軍への入隊を希望し、反日の銃声が高らかに響く白頭山地区へと向かうようになった。

このような情勢の変化は、人民革命軍をして白頭山地区の根拠地を強力に固めつつ武装闘争を国内深くへ拡大することを要請した。

第2に、白頭山地区は軍事地形学的見地からして、攻めるに難しく、守るに易い天然の要塞の地であるということにあった。抗日武装闘争とりわけ遊撃戦を拡大展開する上で白頭

山一帯は、願ってもなく有利な基地になりえた。

ましてや日本の植民地支配に終止符を打ち、祖国と民族の解放を成就するためには、武装闘争を一日も早く国内に拡大しなければならない。そのためには、白頭山一帯を拠点として朝鮮と中国の境界を自由に往来しながら縦横無尽の戦いを展開するならば、遊撃戦によって敵の強大な軍事力を消耗弱体化させ、その中で全朝鮮民族を反日闘争へと奮い立たせることが出来るのである。

第3に、白頭山は、それが朝鮮民族の精神を抱えているという意味からしても重要な山だと言える点にある。

前に述べたように、祖宗の山白頭山は、朝鮮のシンボルであり、5000年の悠久の歴史を誇る朝鮮民族発祥の地である。そうした意味で朝鮮民族は白頭山を崇拝し、白頭山に国と民族を救う偉人が出現するものと大きく期待していた。

このように朝鮮人にとって、白頭山の崇拝は祖国に対する憧れであり、愛国の心情である。これは朝鮮民族に通底している感情なのである。白頭山はこのように朝鮮民族の胸中に、朝鮮のシンボル、祖国解放の導きの星という思いを宿していた。

白頭山を拠り所にしてはじめて朝鮮民族の総力を祖国解放の闘いに結集して決定的な勝利を遂げることが出来るということは、すでに1930年代前半期の抗日武装闘争が実証した総括であり、当然の帰結であった。

このように白頭山一帯を拠り所にして、強力な革命のとりで、指導の中心拠点につくり上げることは、朝鮮革命にとって揺るがせに出来ない重要な課題であった。

進展する革命の主体的ならびに客観的な情勢と民族的感情、軍事的意義を明確に見すえた金日成同志は、白頭山地区を抗日革命の強力なとりで、指導の中心拠点にならしめるべく明晰な闘争方略と方針を打ち出し、そのための活動を綿密に指導した。

金日成同志は、1936年2月28日～3月3日に開かれた南湖頭会議で、朝鮮革命の中軸をなす朝鮮人民革命軍の主力を白頭山と国内へ進出させる方針を提起した。

この南湖頭会議の決定により、朝鮮人民革命軍の主力は白頭山地区に進出し、この一帯を中心にして猛烈な軍事・政治活動を展開した。

朝鮮革命指導の中心拠点をなす白頭山根拠地は、白頭山秘密根拠地とその周辺の広大な山林の中にある幾つもの密営（秘密兵営）及び白頭山一帯住民地域の組織網からなっていた。

密営は、朝鮮国内の白頭山密営、獅子峰（サジャボン）密営、熊山（コムサン）密営、仙五山（ソンオサン）密営、間白山（カンベクサン）密営、無頭峰（ムドゥボン）密営、小胭脂峰（ソヨンジボン）密営、中国東北部の黒瞎子溝密営、芝陽蓋密営、二道崗密営、横山密営、鯉明水密営、富厚水密営、青峰密営などがあった。

さらに白頭山地区を中心に、党及び祖国光復会をはじめさまざまの革命組織が網の目のように張りめぐらされて半遊撃区が形成された。



白頭山密営の司令部



獅子峰密営



熊山密営



無頭峰密営



仙五山密営

金日成同志は引き続き、革命組織を朝鮮の諸地域に拡げていった。こうして白頭山は、反日民族解放闘争を全国的な規模へと拡大させる革命の策源地、朝鮮人民革命軍の戦略的基地、後方基地として強力に固められた。

今日、朝鮮人民の無比の革命精神の根本をなす白頭の革命精神も、ほかならぬこの時期に白頭山で形成されたのである。

折り重なる困難を克服しながらあくことなく前進し続けたのが朝鮮革命の歴史であり、朝鮮の革命は相次ぐ困難と挑戦を乗り越えて今日に至ったのである。この道のりで朝鮮人民が一切くじけることなく勝利一路を歩みえたのは、白頭の革命精神を内に秘めていたからである。

金日成同志の指導を得て朝鮮の革命家たちが白頭の密林で達成した、領袖を中心とする革命的団結は、白頭の革命精神の精髄である。

朝鮮民族自体の力で国の独立を果たすべきだとする哲理も、ほかならぬ白頭山の革命精神に基づいている。

「アジアの盟主」を自称する日本帝国主義との全面的対決を宣言した時、朝鮮の革命家たちはどこか強力な国の支援をあてにして抗日武装闘争を始めたのではなかった。

朝鮮の革命家たちは自らの力を信じ、銃後も他国の支援もない苦しい環境の中で頑強な闘いを展開し、国の解放を成就して、民族解放闘争史を飾る英雄叙事詩を血潮をもってうたいあげたのである。

朝鮮の革命家たちは、金日成同志の崇高な民族愛と同志愛に心酔し、わが身を惜しみなく祖国と民族を解放する聖戦に捧げたのであり、金日成同志さえ健在なら国の解放は疑いなく成就でき、人民の世界をつくり上げることができるという確信を抱いて戦った。

革命の聖地

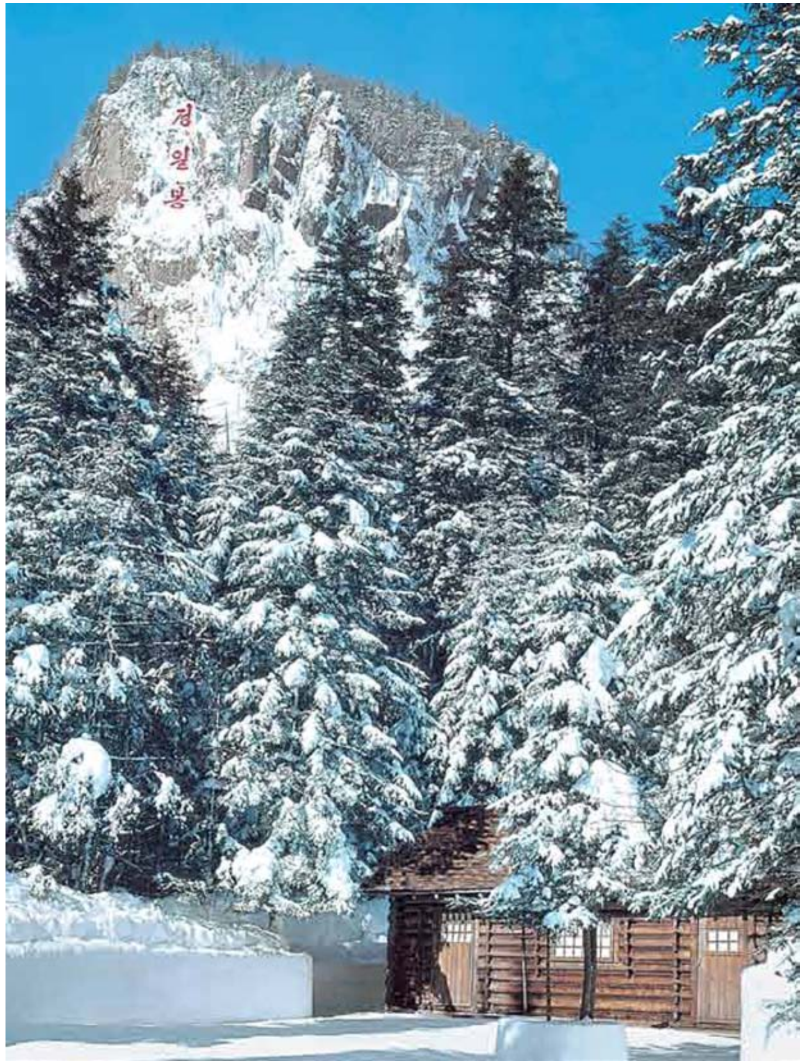
白頭山は朝鮮人民の心のふるさとであり、かずかずの追憶を呼び起こす山、朝鮮の亡国史と教訓、新朝鮮の歴史と朝鮮革命の真理を伝える山である。団結によって開かれ、団結をもって勝利してきた朝鮮革命の歴史の起源もほかならぬ白頭山にある。

何にも増して白頭山は、朝鮮民族が白頭光明星として押し戴き、朝鮮の未来であると絶対的に期待した偉大な指導者金正日同志が生まれ育った白頭山密営の生家を持つ、革命の聖地である。

白頭山に生まれた金正日同志の天稟は、白頭の気象そのものであった。

日本の植民地支配下にあっても朝鮮人民は、国の未来を担って立つであろう白頭光明星の誕生を伝え聞いて、朝鮮の輝かしい将来が約束されたとして喜びにあふれた。

長年、傑出した偉人の出現を祈願してきた朝鮮民族にとって、白頭光明星の誕生は、幸運中の幸運であった。最も革命的にして愛国的な家庭に生まれ育った金正日同志は、朝鮮人民の



白頭山密栄の生家と正日峰

輝かしい未来であり、新朝鮮の前途を照らす光であった。

当時、白頭山をはじめ朝鮮の各地に、白頭光明星の誕生を祝う朝鮮民族の喜びを示す標語がしきりに現れて民心を揺さぶった。

日本警察機関の1944年1月4日付けの文書「思想犯罪月報に関する件」に、天が下した赤子が白頭の霊地三池淵に生まれたという宣伝が戦時下の民心を大きく混乱させたとする記述があった。そこには以下のようなくだりもある。

「天が下した赤子は朝鮮を独立させる将軍になるとし、朝鮮は遠からず必ず独立する、しかし独立を遂げるには、各官公署の官吏どもをやっつけなければならんから、みなその成就にこぞって乗り出せ、としている」

今日も白頭山とその周辺のみならず各地の山に、当時書かれたスローガン入りの樹木が発見されている。長い歳月の風雪にさらされて、文字は薄れているが、スローガン入りの樹木は、白頭山に今一人の偉人を迎えた朝鮮民族の栄光と誇りを人々に語り継いでいる。

金正日同志の誕生により、白頭山はその真正の主人を迎えたのである。それは朝鮮人民の抗日武装闘争史が生んだ一大慶事であり、朝鮮の新しい歴史の開始を告げる出来事であった。

それ以来、なにびとにもまして正義感の強い不屈の抗日革命闘士たちの崇高な同志的信義心に包まれて成長した

金正日同志は、まがうことのない白頭山の子、パルチザンの子であった。

今日、白頭山地区は朝鮮革命の聖地として立派に整えられている。ここには、朝鮮革命と朝鮮民族の聖山白頭山を革命の聖地にふさわしく整えようと願う朝鮮人民の一致した志向と時代の要請が反映されている。

白頭の革命伝統は、抗日革命闘争の中で朝鮮の革命家たちが発揮した領袖への限りない忠実性の伝統であり、試練に満ちた戦いの途上で、困難を極めた革命の任務を自力であくまでも無条件遂行する自力更生、刻苦勉励の革命伝統であり、千万べん倒れようともまた立ちあがって戦う百折不撓の闘争精神である。1950年代末～1960年代初、党内に巣くっていた反党修正主義一味は、朝鮮人民の思想・感情とは縁もゆかりもない封建儒教思想を人民に押し付けて革命伝統を抹殺しようとはかった。

こうした事態の中で革命伝統を揺ぎなく守るのは一刻もおろそかにすべきでない革命の要請であった。

この重大な事態を鋭く見抜き正したのは、若年の金正日同志であった。

中学時代、革命戦跡の踏査という言葉すらなかった1956年6月、10代の学友たちと組んで、白頭山地区の最初の踏査行軍を行ったのも金正日同志であった。

白頭山地区のいずこを問わず、朝鮮革命の根である白頭の

革命伝統を守るべく、金正日同志が歩んだ足跡の残されていない地はない。

金正日同志の疲れを知らぬ指導を得て、1960年代末から白頭山地区は、革命伝統教育の拠点として立派に築かれた。

白頭山地区の革命戦跡は、三池淵大記念碑、茂山（ムサン）地区戦闘勝利記念塔、白頭山将軍峰の頂に立つ事績碑、青峰（チョンボン）、ペゲ峰、茂浦（ムポ）などの事績および戦跡区域からなっている。

三池淵大記念碑は、池のほとりに造成された広い教育の場（奥行400メートル、幅250メートル）の前の軸線の中心に、革命の聖山白頭山と三池淵を背景にして高く立つ金日成同志の銅像と副主題の彫刻群像からなっている。



茂山地区戦闘勝利記念塔



三池淵大記念碑

銅像の基壇である将軍岩の形象は、遠くに望見できる白頭山の連峰と調和をなして、白頭山の険山峻嶺を股に掛けて日本軍を撃破していた当時の青年将軍の雄姿を造形芸術的に立派に浮き出させている。

茂山地区戦闘勝利記念塔は、1939年5月の朝鮮人民革命軍大部隊による国内進攻作戦の勝利を記念して1971年5月、白頭山地区大紅丹(テホンダン)の台地に立てられたが、2002年5月、時代の要請に即して新たにユニークな形式で建て直された。

記念塔は、銃と剣をかたどって建てた銃塔と、銃塔を構図的に支えて展開された大型の副主題の彫刻群像、革命事績碑からなっている。

今日、白頭山地区の三池淵市は革命的に作り直されて、昔日の面影はそのどこにも見出されなくなった。多層のアパートや2、3階建ての住宅、ホテルなどが立ち並ぶ三池淵市の姿は、朝鮮の新しい山間文化都市のモデルである。

金正日同志の銅像の前の本道を軸とする街路が四方に走る三池淵市は、教育区画と住宅区画、商業サービス区画に分かたれている。

三池淵市科学技術図書館、白頭山総合博物館、三池淵イモ粉生産工場、三池淵ブルーベリー飲料工場、密林(ミルリム)院や天池院などの便益サービス施設、学生少年宮殿、三池淵湖畔地区の踏査宿営閣などが並び立ち、うっそうと茂るカラマツ林だけが風にそよいでいた白頭山麓の昔日の面影はどこにもない。

北部高山地帯の特性を生かしたさまざまの形の屋根を持つ建物や住宅、各種の標識板、街灯、イルミネーションなどで彩られた三池淵地区の夜景は、現代文明の縮図だとして見る人たちを驚嘆させている。

大自然の密林の中にあるスキー場もここを訪れる人々に青春の喜びを抱かせている。

地方人民病院のモデルとして建設された三池淵市人民病院には、最新の医療設備と器具、病室、運動治療室など、病院の全般的な構成要素がもれなく具備されており、市民や踏査者たちはここで無料で医療サービスを受けている。

これらのすべては、祖国と人民にすべてを捧げた人民の偉大な領袖金日成同志と偉大な指導者金正日同志に対する敬愛する金正恩(キムジョンウン)同志の忠実性と、人民のためにとあらば空の星も取ってくるべきだとする、その人民愛によりもたらされた結実である。

白頭山地区の変貌はまた、金正恩同志の指導の下に、朝鮮人民が達成しようと目指す人民の理想郷がどのようなものであるかを見せるモデルである。

金正恩同志はしばしば白頭山に登って、祖国の富強繁栄と未来を構想し、人民の幸せを願って瞬時も思索を休めず、人民への献身の道をたゆみなく歩んでいる。

こうして朝鮮では、指導者と人民の渾然一体が一段と高い境地に達し、強国の礎が整ったのである。

優れた伝統があれば、その継承も万全になされる。とはいえ、伝統はおのずと継承されるのではない。自らの伝統を立派に守り、継承することによってのみ、国家・民族の未来が輝くということは、朝鮮の革命と人類の政治史が実証している真理である。

朝鮮人民の根本的な闘争精神である白頭の革命精神は、白頭山なくしては考えることが出来ず、朝鮮革命の発展も白頭山を抜きにしてはありえないというのが、朝鮮人民の信条である。

社会主義朝鮮と共に白頭山は今後も朝鮮のシンボルとして、その雄壮な姿を誇り、揺るぎなく立ち続けて、朝鮮人民に革命精神を植え付ける革命の聖山として光り輝くであろう。



三池淵市

自然環境

白雪に包まれたそそり立つ白頭山は、そのすぐれた自然と山岳の美、景観により、東方の名山として名高い。



風　致

自然の美

朝鮮は古来、山が美しく水が清い三千里錦繍江山と称されてきた。その中でも朝鮮の美を代表する8大光景を朝鮮8景と呼んでいる。

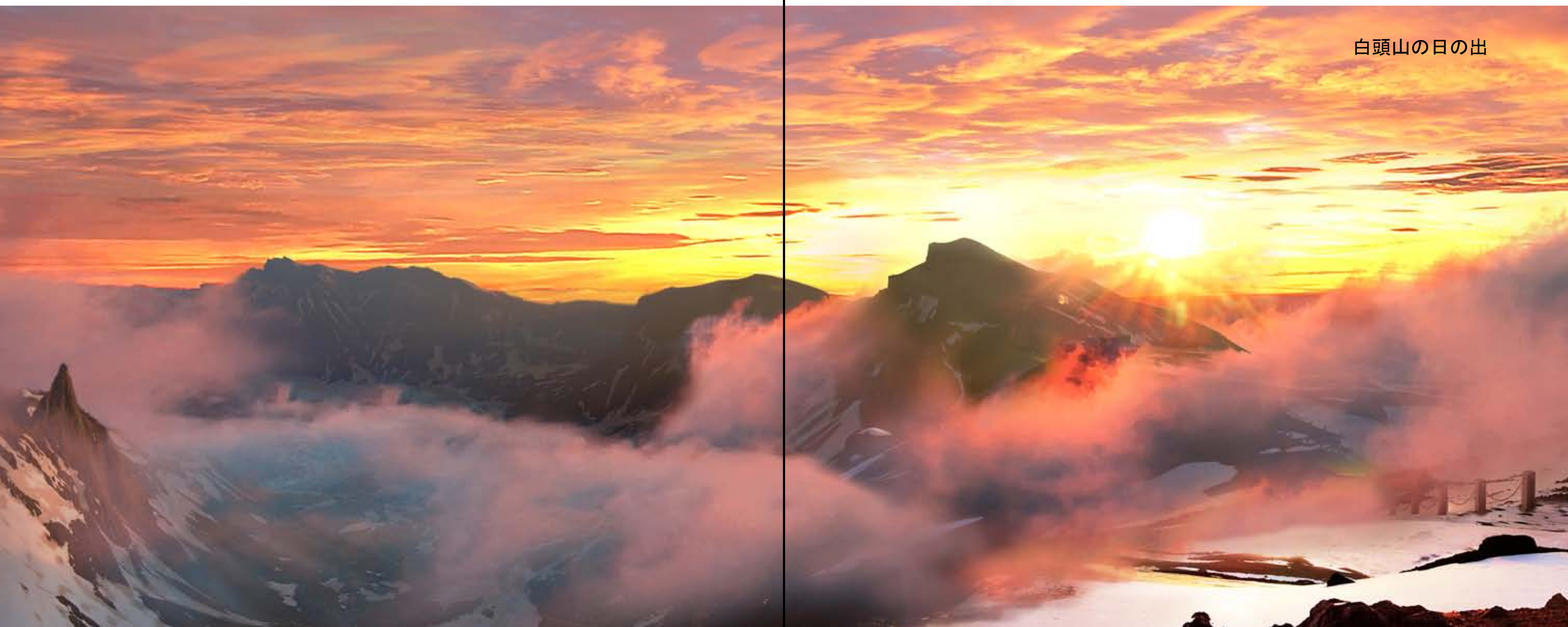
朝鮮8景は、白頭山、平壌（ピョンヤン）、金剛（クムガン）山、妙香（ミョヒャン）山、赴戦高原、智異山、海雲（ヘウン）台、仏国寺である。白頭山は朝鮮8景の筆頭に数えられている。

白頭山の光景の中でも第一の壮観は白頭山の日の出である。

「白頭日出」として名高い白頭山の日の出が見れば見るほど素晴らしいと言われているのは、その壮観が人間の美的感情を心地よく刺戟するからであろう。

雲が眼下にたなびく山上に立って、白雪に包まれたそそり立つ白頭山を背景に赤い朝焼けを広げて徐々に昇る朝日の姿は、人々の心を恍惚たる境地にいざなうのである。

早暁の暗がりの中に漂う雲の間から差す細い陽光は次第に太くなり、たちまちにしてたなびく雲を押し払うと、見る間



白頭山の日の出

に神秘な様相を呈する。

高々とそそり立つ峰々や天池の水面をくれないに彩る白頭山の日の出は、季節や天候の違いにより、その様子が異なり、位置や見る人の感情により、感想も違ったものになる。それで、白頭山の日の出を見ずして白頭山のすべてを見たなどとは言うなかれという言葉が、朝鮮人の間で語られている。

白頭山の景観はこれだけではない。1931年、安在鴻（アンジェホン）の著『白頭山登陟記』には、白頭連峰と天池の荘厳な光景、無頭峰から見晴らす大展望、清く愛らしい三池淵の美が白頭の3景だとされている。

この3景については、18世紀の書『白頭山紀行』『白頭山遊覧記』『白頭山考』『東国名山記』などでも一様に強調されている。

万里の蒼空にそびえる白頭連峰の姿態と天池の豪放な絶景が一つに溶け合った姿は、なんとも形状しがたい景観である。

さらには無頭峰の頂上から眺望する千古の大森林と、それを取り巻く大小の峰々の全景、清く愛らしい三池淵の美は、豪放な威風堂々たる男性的な風格と清く優雅な女性的容色が見事に調和した景勝である。

天平（チョンピョン）と呼称されている白頭山地域の大樹林も白頭山のユニークな風景である。対角峰（テガク）、胭脂峰（ヨンジ）、仙五山、間白山（カンペク）、小白山（ソペク）、胞胎山（ポテ）、冠帽峰（クァンモ）などが四方に点在し、数里に広がってい

るうっそうとした樹林が天空と相対しているとして名づけられた天平は、夜が明けると、東の空から陽光が瞬時にして差し、一望千里の樹林を赤く染める。それに日が沈む頃になると、小白山の方角で張り出した霧が天平に広がるが、その情景も一幅の絵のような美しさである。

天平はまた、鹿茸、麝香、野生朝鮮人参やコウライキテンの毛皮など貴重な薬材と物産の豊富な産地でもある。

この他にも、雪に覆われた山の上に咲く万病草（キバナシャクナゲ）の花は、白い絹布の上に縫い取った花模様のようであり、厳冬の冬も凍ることなく流れる鯉明水（リミョンス）の滝や小白山のせせらぎも白頭山の景勝に彩りを添えている。かてて加えて、年々光明星節（金正日同志の誕生日）を迎えて催される

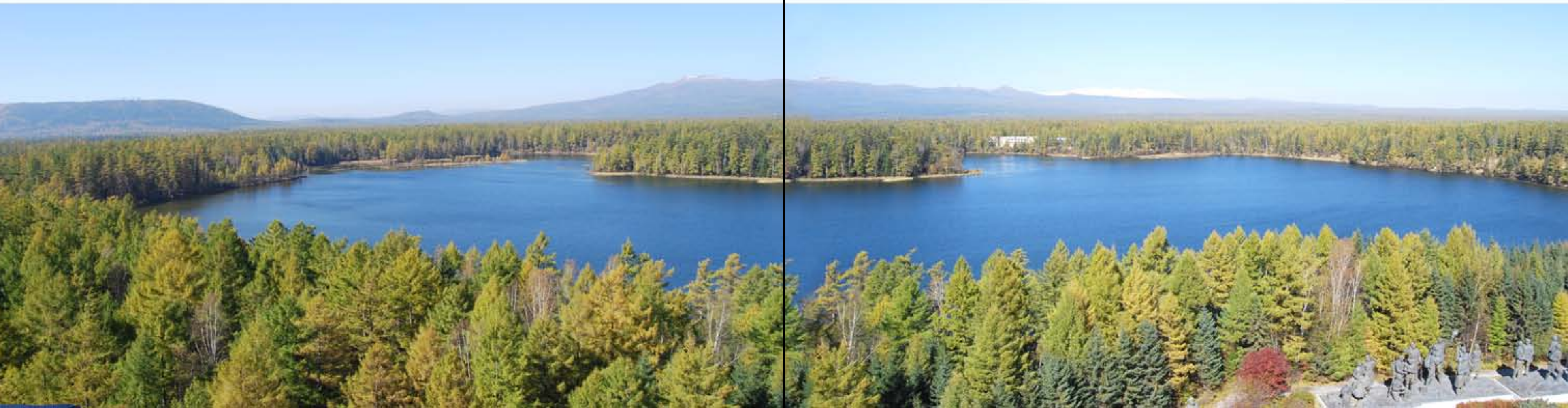


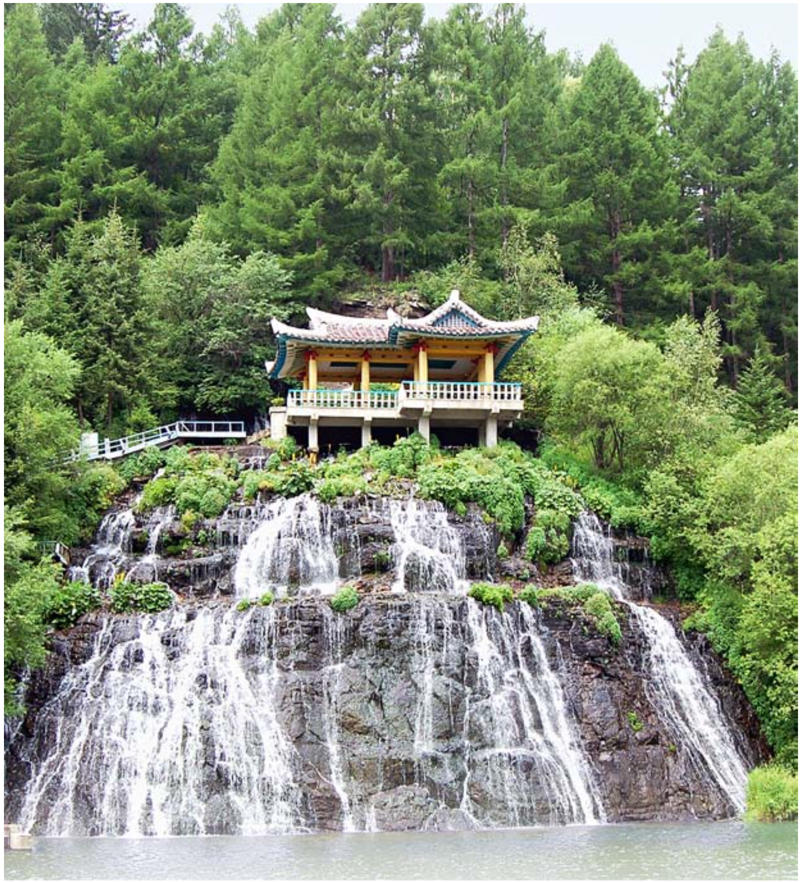
雪に覆われた山の上に咲いた万病草



天 平

三池淵





鯉明水の滝

三池淵市の氷彫刻祭典も、人々に大きな喜びを与えている。

　このように白頭山は、自然の美しさを天下に誇る朝鮮の名山である。

山岳の美

　白頭山は山岳の美も、朝鮮の多くの山のうちで最高の山である。

　四季の別なく白雪を戴いて立つ白頭山を指して、古くから朝鮮民族は白玉をもって築き上げた山だと称した。

　遠くから望見する白頭山はその連峰がなだらかに連なり、かめを逆立てたように思えるが、実際に山の頂に立って見渡すと、天池を囲んでそそり立つ峰々はいずれも急傾斜をなしている。

　一つの巨大な環を形づくって天池を取り巻く白頭の連峰は、その一つひとつが自らの際立った姿を誇っている。そこには、将軍峰のように高く大きい峰もあれば、低い峰もあり、先の尖った峰、釜のふたのような湾曲した峰などもある。それらの峰はいずれも、白頭連峰の最高峰将軍峰に根ざしている。

　噴火口の外輪をなす数々の峰のうち、海抜2500メートルを超えるものは20を数える。東側稜線の中程に朝鮮の最高峰将軍峰（2750メートル）がそそり立ち、その北方1.1キロ程の所に嚮導峰（2712メートル）が、さらにその先900メートルに双子虹(サンムジゲ)峰（2626メートル）があり、南西側には燕(チェビ)峰をはじめ諸峰がそびえている。

　西側稜線の中程に青石(チョンソク)峰（2662メートル）と、常に雪に包



白頭山の奇岩の一部



白頭山の絶壁の一部

まれている白雲（ペクウン）峰（2691メートル）が立ち、月門側には遮日（チャイル）峰（2596メートル）が立っている。

また北側稜線の中程には、様々の形の岩が層をなし、南側稜線には高低様々の岩や峰が連なっている。

外輪山の主な峰の高さの差は150メートル内外である。このように峰の高さが似通っているので、天池の外輪はあたかも屏風を立てているかのように見える。

噴火口の東側にそびえる飛楼（ピル）峰の一帯は険しい岩壁からなっている。将軍峰を守ってそびえているような趣の飛楼峰は、白頭火山噴火口の山岳美を代表する一つの独特な峰で、その尾根はかなり明確な形態を作っている。

飛楼峰を主峰とする岩の尾根は、長さがおよそ1キロであるが、将軍峰と飛楼峰を結ぶ600メートルほどの区間の稜線はきれいに続いているが、上部の線は刃のように鋭い。そのため、頂上に登るのは容易でなく、尾根伝いに行き来することができないような山容をなしている。

この一帯には熊（コム）岩、燭台（チョクテ）岩、獅子（サジャ）岩、虹（ムジゲ）岩その他様々の形の岩が立っており、それでこの一帯は白頭山の万物相と呼ばれている。

以上のように、白頭連峰の山岳美は大自然の鏡と言われるほどの素晴らしさである。

それら峰々の一部を下に紹介する。

将軍峰

海抜2750メートルの将軍峰は、東北アジアの太平洋沿岸の広大な地域を眼下に見下ろす最高の峰で、白頭山を代表する聖峰である。この峰には、白色の軽石が1～20メートルの厚さで敷き詰められている。

将軍峰は噴火口中心の南東側にそびえており、飛楼峰の稜線に沿って天池の方におよそ45メートル突出している。

山の尾根は刃のように鋭利で、その上を歩くことはできな



将　軍　峰

い。尾根の上には、石塔のような、先端が尖った幾つもの石柱が飛び立ち、その最高のものが海抜2580メートルの飛楼峰である。

飛楼峰の先の尾根は木の枝のように分かれ、最後には八つの地脈をなして天池の水面に至る。この尾根の岩は非常に固く緻密で、噴火の際も崩れることがなかった。現在も大きな塀のようにその形態を保っている。

将軍峰には火山弾と呼ばれる岩石が四方に散らばっているが、その大きさは様々で、直径が数十センチのものが大半であり、最大のものは1.2メートルである。

嚮導峰

嚮導峰は、噴火口の中心から東側2.1キロにそびえる、外輪山のうち将軍峰に次ぐ高峰である。

天池の岸辺に重畳する層岩からなっている絶壁の上に天を突かんばかりにそそり立つ、海抜2712メートルの峰である。

元来、天の王が降臨した峰だとして天王峰と称されていたが、金正日同志の不滅の業績をとこしえに伝え、金正日同志を高く戴こうと願う人民の志向と念願をこめて、嚮導峰と呼ばれるようになった。

嚮導峰の外側の山腹には金正日同志の親筆になる**「革命の聖山　白頭山　金正日」**という文字が浮き彫りにされている。

嚮導峰の南西1キロほどの先に将軍峰がそそり立っている。嚮導峰は将軍峰と同様、西側の噴火口から噴出した各種の熔岩の層からなっている。嚮導峰の南側急傾斜面には、山岳氷河の移動により形成された氷河堆石丘陵がある。



嚮　導　峰

双子虹峰

双子虹峰は、天池の東側の岸にそびえる、海抜2626メートルの峰である。この峰は嚮導峰の北側960メートルほどの所に尾根の鞍部を挟んで立っている。尾根は峰の北と南に伸び、西側のふもとは天池の岸辺の崖に連なっている。

双子虹峰は、峰の岩壁の間を巡って、ほぼ平行に並んで伸びる２筋のテープ模様が、遠くから見ると峰を背景にしてかかった一双の虹のようだとして付けられた名である。

自然の景観と逸話

白頭山には、特異な自然の景観や現象が多い。そうした景観や現象は、白頭山に対する人々の興味を引きつけている。

以前の地名

白頭山は古くからいろいろな名で呼ばれてきた。

白頭山という名は７世紀からの呼称であり、白頭山の古い地名には次のようなものがある。

太白山：大きく白い山
不咸山：明るい山
蓋馬大山：うつ伏した馬の鞍のような山
徒太山：幾つもの峰の連なる山
長白山：長く白い山
白山：白い山

世界的な探検の対象

地球上には標高が3000メートルを超える山が多く、火山は数百を数える。とはいえ、高い山や火山だとしてそのすべてが探検の対象になっているのではない。

古くから白頭山が世界的な探検の対象にされたのは、火山活動の特異なことに、自然の景観の神秘なことにあった。白

頭山は、火山学的な見地からすると噴出の回数が多く、しかも明確な噴火段階を経て、人類の歴史時代にも火山活動を止むことなく続けた。他の火山とは異なり、爆発的な噴火と流出形式の噴火が結びつきながらも、とりわけ爆発的な噴火が多く起きるという特異な火山であった。

ことに世界の多くの地理学者や火山学者の注目を引いたのは、A. D. 1000年頃にあった白色軽石の大噴出であった。この時の噴出物は海を越えて日本の領土にまで落下した。

一般的に探検とは、自然の秘密を明かし、自然を征服するための野外科学調査研究活動の総体である。探検は危険や困難を乗り越え、前人未到の大自然を対象とする肉体的ならびに科学的な闘いである。探検がいつ誰により初めて行われたかという歴史上の記録は明らかでないが、人類の歴史が始まった初期からあったものと見なされている。

白頭山は、世界のどの火山にも見られない、大陥没噴火口が山頂に理想的に作られ、そこに水がたまり、膨大なカルデラ湖——天池が生じた特殊な死火山である。

白頭山はまた、数回もの氷河期と間氷期の不断の交替を通して、生物系の形成と進化の過程を複雑に経過し、山の高さには必ずしも関係せず気候上様々の特性が生じ、風致の秀麗なことで世に知られるようになった。

以上のような火山活動の特殊性と秀麗な風致、自然現象の神秘は欧米諸国にも知れわたり、地理学者、登山家、探検家たちは白頭山に注目した。

こうして白頭山は久しい前から、朝鮮、中国、モンゴル、インド、日本などのアジア諸国はもとより、ロシア、イギリス、フランス、ドイツ、アメリカ、カナダなどの欧米諸国の科学者や登山家の主要な探検対象になった。世界の探検史に記録されている白頭山の主要な探検回数だけでも60回以上に達している。

探検史

白頭山の探検は、その目的と規模、内容と方法の上で、一定の歴史的段階を経て進められ、発展してきたが、初期は探検ではなく、興味を主とする登山であった。

人々が白頭山麓に最初の足跡を印したのは1400年代からである。この時に始まった白頭山の探検は、20世紀初めまでは極めて緩慢に消極的に行われ、レベルが低く、ごく一面的に進められたにすぎない。

15世紀から19世紀の中頃までは主に、白頭山の位置と国境を調査し、確定することを目的とした探検であった。その後は白頭山の秀麗な風致と神秘な景観を楽しむ人たちの登山が主となった。

人々が白頭山を発見し、登山を始めた歴史は数百年を数えたが、頂上に登ったのは1670年頃である。

その時頂上を極めたのは朝鮮の探検家であった。道の

ない険しい山岳を苦心惨憺して登り、頂上に達した彼の目の前に広がっていたのは、夢想だにしなかった広大な湖だった。

彼は、その広大かつ荘厳な山頂の湖のあまりもの神秘さに驚嘆し、山の景観に我を忘れた。

彼は下山後、この山頂の湖の水が地軸を揺るがしながら滝となって流れ落ちる凄まじさや神妙な気象の変化など、目撃した白頭山の想像を絶する景観を世人に伝えるべく、紀行文を残した。

このようにして白頭山頂の広大なカルデラ湖が世界に知れわたると、白頭山に関する伝説なども朝鮮で生み出され、世界の各地から大きな好奇心や探検熱を抱いて白頭山に登る人たちが相次いだ。

1682～1684年に初めて、天池を中心とした白頭山の略図が作成され公開された。こうして、天池の地理的な位置と形態、それに白頭山の景観が地理的により明確に知られることになった。

1764年には、白頭山の頂上から天池をはじめとする白頭山を見下ろす俯瞰図が作成され、そこには天池の恍惚たる景観を紹介する文が添えられていた。

朝鮮中世の地理学者金正浩（キムジョンホ）（19世紀初め～1864）の白頭山の探査は、白頭山の探検上転機をなした貴重な壮挙であった。

彼は1835年から1861年まで３度にわたり、厳しい白頭山の自然と闘いながら探査を具体的に進めて、白頭山一帯の地形をかなり科学的な数理的土台に立脚して、独特な形象法をもって作図することで、白頭山の豊かな景観を詳細に描き出し、国の地理学的財宝を豊かにすることに大きく寄与した。

1898年、ある探検家は、天池を探査してその地理的な位置と形態学的な基本的特徴を確定し、また白岩（ペクアム）温泉を発見した。そうした中で、不意に天池の水中から黒煙とガスが立ち昇り、けたたましい轟音がとどろいたと思うと、火山灰が噴出した。この白頭山の小噴出を目撃した彼は、この出来事を記録に残した。

白頭山の探検は20世紀に至り、自然の景観を楽しむ個々人の登山の域を脱して、集団的な探検隊による登山が主流になった。ここでは、学術的な調査以外に、軍事・経済的な目的をもって白頭山を踏査する傾向が大きくなった。

こうして、20世紀の初めから太平洋戦争が終わった1945年までの間、10回余もの踏査が進められたが、その多くは日本帝国主義侵略者によるものだった。

1907年8月、中国の一登山隊は、安図から白頭山に登り、天池を中心とする白頭山の写真を撮った。これは白頭山を最初に撮影したものだった。

ついで1910年7月、ロシアの登山隊が白頭山に登り、一般

的な調査を行い、写真を撮った。

さらに、1911年にはヨーロッパの一登山隊が白頭山に登り、天池をはじめ白頭山一帯の風景を42枚の写真に収めて公開した。これは、白頭山を紹介する上で科学的、客観的な資料になった。

日本が朝鮮を占領した初期の1913年、大陸の侵略を目指して、地形及び資源の調査を目的にして地形、地質、農林部門の専門家たちが探検隊を組み、白頭山一帯の調査を行った。

この時から白頭山の探検は、その規模と目的が侵略的、略奪的な性格を帯びることになった。

1920年代に入ると、白頭山の探検は一般的調査の枠を脱して、次第にその科学的深さが加速され始めた。特に天池の底の地形と水深についての関心が高まり、自然の景観を科学的に調査し、確定しようという企図も現れ始めた。

1926年、日本は白頭山の全般的調査を目的にして、地形、地質、動植物、農林部門の専門家50名からなる探検隊を組み、現地に送り込んだが、一般的調査の域を抜け出すことはできなかった。

1927年8月、「朝鮮教育会」の登山隊が天池の深さを確かめるべく、ブリキの小船を作り、白頭山に登ったが、途中船が破損して目的を果たせず、ただ天池を頂上から眺め、簡単な登山記を残しただけで解散した。

1929年、今一つの探検隊が白頭山に送り込まれた。彼らは

筏を組んで水深の計測を試みたが、測定器具が粗末なものであり、目まぐるしく変化する気象に妨げられて測定をままに進めることができず、岸近くの数ヵ所で水深を計った。しかし、それもあやふやなものにすぎず、観測のデータは一切公開されなかった。

同年8月、日本軍茂山守備隊の一個中隊が重武装して白頭山の頂に登り、その一帯の国境警備の状況と地形を具体的に確認したうえで、天池の規模を確かめてみようとした。対岸の白岩峰の噴火口壁に向けて機関銃を連射し、銃弾が発射されて崖に当たる瞬間までの時間と速度を掛けて、天池のおおよその距離を計ろうとした。

ところで、その時中隊の道案内をした朝鮮人登山家の話によると、けたたましい機銃音が耳を聾しただけで、弾丸は天空に上がったのか、天池の水中に吸い込まれたのか、白岩峰の崖に当たった様子は一切なかった。それで彼らは悄然として山を降りたという。

1930年代に、天池を基本対象とする、かなり大掛かりなアメリカとドイツの共同探検隊が白頭山に登り、天池の一部区域で水深を計った。天池の中心区域までは入れず、数ヵ所で計った結果をまとめて、天池の水深は312.7メートルだと発表した。

1931年7月、朝鮮人登山家が白頭山に登り、山の景観の一般的な調査を行い、既存の調査資料を合わせて、『白頭山登

陟記』を著した。

白頭山の探検が始まって以来初めて冬の探検が行われたのは、1934～1935年の冬である。

1934年12月、日本の某大学の「遠征隊」が、吹雪のすさぶ酷寒の白頭山に登り始め、年が明けた翌35年1月初め天池に至ったが、寒さがあまりにもひどくて探検を中途で放棄せざるを得なかった。彼らは天池の氷試片を幾片か持って帰ったが、その後『白頭山』というパンフレットに、白頭山天池の氷の厚さが３ないし４メートル、積雪の深さは1.5メートルだったという虚偽を混じえて白頭山を紹介した。

1939～1941年にも毎夏、白頭山の探検が行われた。

1942年夏、満鉄吉林鉄道局傘下の民間人40余名と重武装した関東軍及び「満州国軍」200余名からなる登山隊が白頭山の総合的な調査を行った。ここでも幾つかの位置で天池の水深を測定したが、すでに公開されている水深より浅かったので、以前に公開された312.7メートルを文書に入れて公開した。

白頭山の探検は、その後も小グループの探検隊や個々の登山家によりたびたび行われているが、その中には、筏に乗って天池の水深を計っていたある人の登山帽が不意の旋風により空に舞い上がったかと思うと、それが元の頭に納まるという奇妙な出来事があった。本人はもとより目撃者たちも茫然とし、白頭山天池の神の仕業だと恐れおののき、ほうほうの体で山を降りたという伝説さながらの探検記もあれば、牛皮のボートに乗って天池に漕ぎ出したが、突風に翻弄され、九死に一生を得て帰ったという記録もある。

白頭山が世界に広く知られてから朝鮮の解放を迎えるまで、国内外の多くの探検家や登山家が艱難辛苦して白頭山に登り、調査したが、白頭山と天池の根本的な秘密はどうしても解明できず、「白頭山の天池は人類の永遠の秘密として残るであろう」という標柱が天池のほとりに立てられ、白頭山の探検はいったん中断された。

近年の探検

太古の昔からそびえ立ち、5000年の長きにわたり朝鮮民族の聖山として崇められてきた名山白頭山の秘密を明らかにする努力は、1980年代に至り改めて本格的に進められた。

史上初めて１トン強の探測用機関船が、白頭山探検の新しい歴史を世界に誇示するかのように広大な水面を縦横に動き回りながら天池を探測した。

こうして、天池の最大の深さをはじめ、水底の秘密も解明され、天池は地球上のすべてのカルデラ湖のうちの最も深い湖であることが確認された。

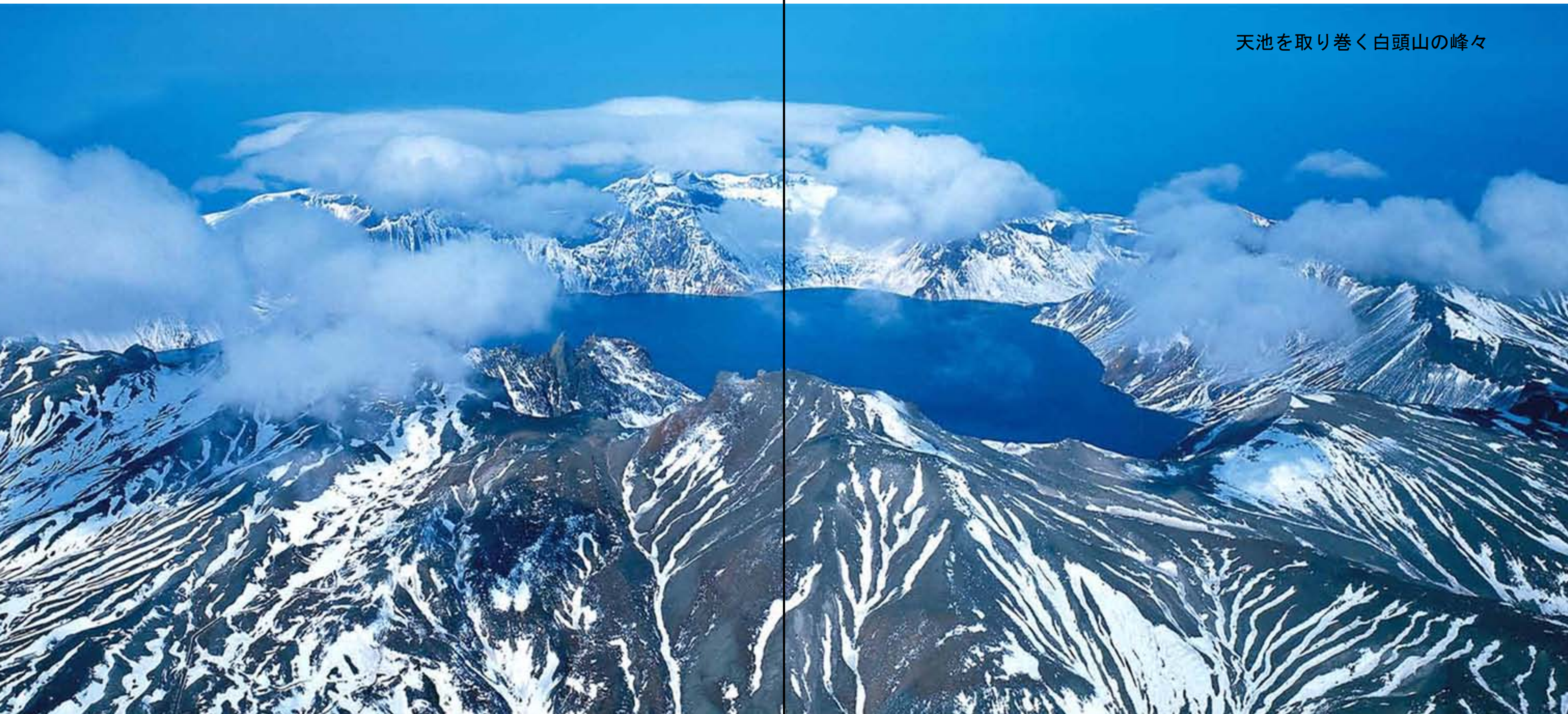
白頭山の冬は実に厳しい。以前の白頭山の探検を振り返ってみても、夏季に白頭山に登った登山家や探検家は多かったが、白頭山で一冬を過ごして探検を続けた登山家や探検隊は皆無である。

しかし、朝鮮の探検隊は、零下40℃以下の天気と瞬間最大風速がほとんど80メートル/ｓに達する酷薄な寒さと狂風にさらされながらも、探検の目的を最上の質的レベルで果たしたのである。彼らは、白頭山と天池の気象、地形・地質、動植物の特性と変化の一般的合法則性などを解明し、科学的、理論的に体系化することで、白頭山の地理上の資料を補充・完成した。

彼らはここで、天池における冷水魚の棲息の可能性と特性を確定し、世界のカルデラ湖における生態系の変化に関する研究で新境地を開いた。

216峰

白頭山には、金正日同志の偉大性について今更のように振り返ってみるようにする神秘な自然の様子があり、万人の



天池を取り巻く白頭山の峰々

耳目を集中させている。

天池の辺にある白頭山の噴火口には高低様々の峰が無数にある。噴火口内の峰々を調査し、測定してみたところ、相対的な高さが20メートルを超える大小の峰の数がなんと216を数えたが、これは金正日同志の誕生日である2月16日と一致している驚くべき数であった。

天池に降りた熊

遠い昔から、白頭山一帯には天池に棲む恐ろしい怪物についての話が言い伝えられていた。

古い記録に残された目撃者たちの話では、体が牛ほどもの、暗褐色の怪獣が天池を泳ぎ、恐ろしい声を上げていたという。彼らはそれが天池を守る獣だと考えた。

実際に天池に未知の怪獣が棲んでいるのだろうか？　長年人々はこの奇異な獣に関心を向けてきた。白頭山天池の怪獣の存在は、近年、白頭山の探査によって確かめられた。

白頭山天池の怪獣なるものは、実は白頭山一帯に棲息する大熊で、天池にしばしば下りてきていたのである。白頭山の天池に熊が下りてくると聞けば、人はまさかと思うかも知れないが、それは紛れもない事実である。

なんのために熊が天池にまで下りてくるかは明らかでないが、恐らく水を飲もうとしてか、それとも何か餌を探してやってくるのだろうと考えられている。

ともかく、熊ばかりでなく他の獣も春と秋に天池の岸辺にしばしば現れているのは事実である。

1981年7月12日の早朝、飛楼峰の頂上に１匹の牛ほどもの大熊が現れ、それが天池の岸に下り、ついで天池を泳いで向こうの青石峰の麓へ上がり、火口の外輪山を越えて姿を隠した。

1983年9月24日午後、体重200キロほどの暗褐色の大熊が嚮導峰と双子虹峰の間から天池の岸辺に下りて歩き、白岩峰の



天池を泳ぐ熊

方へゆっくりと消え去った。

その後も天池へ下りてきた熊の監視状況がたびたび記録されている。

2007年4月にも、冬眠から覚めた大熊が氷の張った天池の上を歩いているのが見られた。雪上の熊の足跡は大人の２本の足が同時に入れるほど大きかった。その時、雪の上に座って30分ほど足の裏をなめていた熊は、人間が近くにいると感づいてか、元来た道を歩いて青石峰の方へ姿を消してしまった。

その後、白頭山麓やその周辺での野外調査中、熊が越冬しているらしい洞窟がいくつか発見されている。

このように白頭山一帯に棲む熊は山の噴火口にもしばしば現れ、天池を泳いで渡りもして伝説のような話を残したのである。

天池の辺で発見されたハゲワシ

2007年6月20日、白頭山天池総合探検隊は、天池の辺で初めてハゲワシを発見した。ワシ科のハゲワシは、鳥類中最大の鳥である。普通その体重は10キロ、翼の長さは75～87センチ、尾の長さは35～41センチ、くちばしは６センチ内外である。

ハゲワシは、中国の北西部、中央アジア、ヨーロッパの南東部、ロシア極東地方の山野に棲み、繁殖期には標高2000～4000メートル、またはそれ以上の高地帯に巣を営む。繁殖後山麓の平地に移り、秋以後は各地へ飛んでいき、朝鮮にもやってくる。

ハゲワシの特徴は、くちばしが強く、翼は長くも広く、額と頭の上に柔らかい毛が生えているが、後頚と側頚には毛がなくて皮膚が露出していることであり、主に動物の腐肉や小動物を餌にしている。

天池の辺で発見したハゲワシは、体重12キロ、翼の長さ80センチ、広げた長さ130センチ、尾の長さ40センチ、くちばしは７センチの大型猛禽である。

白頭山天池の畔では数十種の動物が発見されているが、ここにハゲワシまで現れたことをみると、天池一帯の動植物が次第に多様になり、食物連鎖関係が一段と豊かになりつつあることを示している。

天池の湖畔に現れた淡水亀

白頭山天池の湖畔に亀が棲んでいると言ったら、誰も信じようとしないであろう。けれどもここで何度も見られもし、捕らえられてもいる。

2004年8月、天池の西側にある玉場泉（オクチャン）の近くの深さ２メートルの水の底にいた淡水亀の一種である黄色耳亀が１匹採集された。

黄色耳亀は、北アメリカ大陸南部メキシコの湿地や湖などに

分布しているのみで、もちろん朝鮮にはないとされていた。

ところが、この珍しい黄色耳亀が、朝鮮、それも国内で最も寒冷な白頭山天池で発見されたのである。実に驚くべきことであった。

耳の辺りに黄色い模様が入っているので、黄色耳亀と呼ばれているこの亀はなかなか可愛いので、観賞的価値が非常に大きい。

その４年後の2008年にまた１匹が発見されて、天池の淡水亀は決して1匹や２匹にとどまらないと確認された。

北アメリカ大陸の南部地域にのみ分布している黄色耳亀がどうして白頭山天池に棲息しているのかということは、未だに解明されていない。天池に淡水亀が棲息していることは学術的な意味が非常に大きい。

双子虹

大気中に浮遊している水滴に日光が当たり、屈折及び反射により虹が生ずるのは、自然の法則であり、どこにおいても見られる自然現象である。

虹を見ると誰であれ、その珍しい模様や美しい色に見とれて嘆声をもらすのである。殊に双子虹を見るといっそうの喜びを覚える。

ところで白頭山の頂に生ずる双子虹を見た人はあまり多くはないであろう。白頭山上には双子虹がしばしばできる。

これは、白頭山には雲がよく現れ、霧やにわか雨が頻繁に起きることとかかわっている。その結果、大気中に水滴が他の地方より多く漂い、双子虹が盛んに現れるのである。白頭山では雨がしのつくほど降ってもまたたくうちに止み、雨雲は白いむら雲に変わり、あちらこちらへ漂う。そんな時に天池の上に７色の美しい虹が２重に重なって現れるのである。

白頭山の双子虹はそれを眺める位置の違いにより、天池から立って他端は連峰に届きもすれば、二つの峰にまたがってできるものもあり、時には将軍峰と天池の間に橋を渡しているかのような特異な模様で現れもする。それで、白頭山には双子虹ができるとして双子虹峰の名を持つ峰もある。

白頭山の上に立つ双子虹がそれほど玲瓏とし、優雅なのは、それが清冽な水をたたえた天池の上に立ち、新鮮な澄み切った大気のゆえに、他地に比べて太陽の輻射が強烈で、さらに紫外線も多く注ぐからだと思われる。

嚮導峰上空の彩雲

白頭山の嚮導峰の上空にはしばしば非常に珍しい彩雲が生ずる。

彩雲は伝説や昔話にはよく現れても、実際にはなかなか見られない。ところが、白頭山では毎年2月16日頃になると、嚮導峰の上空にしばしば彩雲が生ずるのである。

毎年2月16日頃には、この峰の向こうから昇る朝日に照らされて非常な速さで峰の向こうへ流れて行く雲が見られるが、それらを天池の湖畔で眺めると一つひとつの雲がさまざまな彩りを帯びているのである。虹と同じ原理で出来るこれらの彩雲は、強い風に吹かれて形が時々刻々変化するが、そのために一つひとつの雲の色がさまざまに変わり、なんとも言えぬほど美しく輝く。

これを見た昔の人たちは、天国に住む王族たちが乗ってこの峰に降りる雲だろうとして峰の名を天王峰と呼んだのである。

花の香りが漂う美しい草原

一般に植物は自然の風致の3大要素の一つと見なされている。

千古の密林のかなたに果てしなく広がる白頭の高山草原は、世界の名勝白頭山の風致の一端をなしている。

白頭の密林を出て草原に1歩踏み入ると、白頭山の雄壮な姿が一目瞭然と目に映り、広大な草原には色とりどりの花が咲き乱れて、人々の目を見張らせるのである。

地球上には数千数百種の植物が生え、それぞれに美しい色や芳しい香りを誇る花が数限りなくあるが、ここ白頭山のふもとに咲く花は、色濃くあざやかで美しい上に、香りも格別である。

草原には花のじゅうたんを敷きつめたかのような青、白、黄色などのいろいろな色のコケや地衣類の上に、赤、黄、薄紅、紫、白色などさまざまの花が負けず劣らず美を競っている。

ここには、春と秋の別なく岩の裂け目に強く根を張り、花を咲かせる野の花から、太いカラマツさえ寒さにあえぐという厳冬にも、白頭の気象を内に秘めて、雪の中でも花を咲かせるキバナシャクナゲ（万病草）など数十種の珍しい花が競い咲き、濃緑の原始林と対応している。

草原の花は、朝日に照らされる頃や雨後の陽射しを受けた時により美しくなる。このような時は露にしっとり濡れた草の葉も明るく輝き、つぼみも次々に開いて、中に宿していた芳り（香り）を四方に発散して草原に充ち満ちる。

草原の風致はこれにとどまらない。この花あの花へと飛び交うきれいな昆虫（蜂）やチョウが大量に草原に満ちる。それに、キジ、ノロ、イワヒバリなどが飛び交う姿も草原を彩りもするが、高山の野イチゴやクロマメノキの実は、人々に喜びを与えている。

このように白頭山の草原は、果てしなく広がる美しい風致と並んで、そこに実る野生の実も独特な風景を添えている。

白頭山の夜景

世界には夜景のすばらしさを誇る地が少なくない。とは言え、歴史の深いいわれに富む白頭山の夜のように、人々に崇厳にして特別な情緒を抱かせるような地はないだろう。

　白頭山の上空に輝いていた太陽がやがて西の稜線の向こうにゆっくり落ちていくと、白頭山は赤い夕焼けに染まる。いつしかそれも徐々に色を失い、天池の上空に星が一つ二つと輝き始まる。

　こうして闇の中に没した白頭の連峰は、澄み渡った空に包まれてそれぞれの奇妙な輪郭をくっきりと現す。白頭山には、一寸先も見えないほどの漆黒の夜もあれば、吹きすさぶ暴風により、大岩がうなり、天池が逆巻く時もあり、一点の闇もなく澄み切り、鏡のように明るい天池の水面が星の光

を受けて輝く夜もある。そんな時微風に吹かれて天池にさざ波が立ち、いろいろの色の軽石の砂をきれいに洗い清めもする。丸い月が嚮導峰の上に上がり、噴出口を照らすと、天池の夜景はますます美しくなる。天池の澄んだ水面をのぞくと、そこにわが姿を映しみているかのような丸い月が見え、さらに空のすべての星がここに群がり集まり、そこに天の川が流れ、お盆のようにまん丸い月が手に取れそうである。

　このように白頭山の日中の景勝もさることながら、その夜景も人々に深い印象を残す独特な風致である。



白頭の夜空の星雲

雪景色

白頭山の雪景色は、厳しい大自然の中に広がる特異な風致である。その特徴は吹き荒れる吹雪と雪崩、無限に広がる雪原と氷の山である。

白頭山上に立って四方を見渡すと、白頭草原と大樹林は日光に燦然と照らされて輝いているが、天池の上空には雪雲がせわしなげに往き来して山を隠しもすれば、すぐに露わにして見せもするかと思うと、黒雲がまたたく間に霧散してぼたんのような雪が空に舞う。つい先程まで一点の風もなかった空がにわかに強風に荒らされて、山肌や草原、樹林、天池の氷の上に積もっていた雪が舞い上がりもすれば、こちらにあった雪の山を向こうへ移し、四方で雪崩が起き、樹林は雪に覆われて姿を隠してしまう。

白頭山の雪景色で見逃せないのは、噴火口壁と天池の湖畔、それに滝などに形成された特殊な氷である。狂乱していた吹雪が止み、日が差すと、氷のひさしを2重3重に作っていた飛楼峰をはじめ天池を取り巻く絶壁の上部に氷のひげがずらりと出来上がり、それらがいろいろの妙なる音を響かせるのである。かと思うと、湖畔の岩岸には噴火口の傾斜面に沿って滑り落ちる雪と天池の氷上から吹き上げられる雪がぶつかってくっつき、固まって、さまざまに雪のひさしを作るのである。また温泉の辺りには数十人が入れるほどの雪のほらも出来る。ほかにも勢いよく流れ落ちる滝の水が千姿万態の氷塊を作る有様も壮観だが、朝日を受けたり夕焼けに映えて、氷の表面にさまざまの美しい色が出来たり消えたりするまばゆいばかりの光景は、白頭山の雪景色の絶頂である。





霧氷に覆われた奇岩

氷のほら

さまざまの自然の風致を誇る白頭山には珍しい氷のほらもある。

雪が固まって出来た巨大なこの氷のほらは、将軍峰の南東側のふもとにある。ほらの入り口の幅は4.5メートル、高さは2.9メートル、奥ゆきはほぼ50メートルに上る。内部には幾つもの氷の柱が立ち、内壁はまるで水晶を加工したような氷の煉瓦で仕上げられたような趣である。床には泉水が流れている。

滝

滝は人々にたくましい力を奮い起こし、情熱をはぐくむ重要な自然の風致の要素だと言える。

白頭山は壮快・雄壮な滝を持っていることで、いっそう力強く美しい。白頭山の滝は概して、山腹の傾斜面と山麓にある。名のよく知られている滝は、鴨緑江に注ぐ思技文の滝、兄弟の滝、白頭の滝、天池の滝などである。

白頭の滝

思技文の滝が落ちる鴨緑江上流の少し下方に、天池の清い水を含めて流れ落ちる白頭の滝がある。

この滝は、鴨緑江の渓谷に沿って白頭山に登る踏査コースを幾分離れた所にあり、天池から地下の泉水となって流れ出た水を主な水源としている。



白頭の滝

高さ12メートルのこの滝は、岩をうがって垂直に落下しており、あたかも長い絹の布を垂らしているかのような趣である。滝の落ちる渓谷の幅は非常に狭い。下に滝壷がある。

滝は周りに水しぶきを上げ、日が当たると銀白色に輝く。滝の一帯にはきれいな花が咲いて滝の風致を一段と彩っている。

白頭山の特異な逆流の滝

数々の神秘境に満ちた白頭山の噴火口内には、意想外の滝も見られる。夏に雨が多く降る時は、噴火口を囲む絶壁の処々を雨水が流れ落ち、文字通り噴火口の滝が生まれる。そんな時に強烈な北西の風が吹いて噴火口の壁に突き当たり、壁面に沿って勢いよく上昇すると、流れ落ちていた水が噴水のように上方に吹き上げられるので、これを称して人々は逆流の滝と言っている。

このように奇妙な逆流の滝は、5、6月の雪解けの頃と7、8月の雨期にしばしば見られる。

思技文の滝

思技文の滝は、悠久な歴史を伝えているかのように巨大な岩を、一流クラスの石工すら彫れないほど巧緻な水道を作って流れ落ちている。滝の高さは合わせて18メートルである。

一度に落ちるのが容易でないのか、それとも白頭山をあとに残して流れるのが惜しいせいか、3段をなして落下している。初めに一筋の水が落ち、深くない滝壷で一休みし、ついで大きさが同じ程度のふた筋の滝となって落下して大きくない滝壷を経て一つに合わさり、鴨緑江の流れに淵を作りながら勢いよく流れ落ちる。


思技文の滝

渓谷には夏期にも残雪がそこかしこに見られ、滝は壮快な水しぶきを上げて落ちる。厳寒の冬は水の流れはなくなり、氷の柱が立っているだけで、惜しい気持ちがしないでもないが、そこに見られる妙な水流の道や滝壷、離れたり付いたりする滝の形は忘れがたい印象を残す。

兄弟の滝

兄弟の滝は、白頭の滝から鴨緑江上流の流れに沿って7.2キロ程下った所にあり、滝の水がふた筋になって落ちるのでこの名がある。

高さはおよそ11.6メートルでさして高くはないが、荘厳ながらも奇妙な滝として知られている。向かって左側の滝が兄の滝だと言われている。

滝が落ちて岩に当たると真珠のような水玉が飛び散り、それらが日光に当たると7色に光り、なんともいえぬほど壮快である。



兄弟の滝

千軍岩

千軍岩は、小白水が鴨緑江に注ぎ込む所から鴨緑江をさかのぼった6キロほど先に位置している。熊山の南西側のおよそ2キロの界線で、鴨緑江渓谷の西壁をなし、鴨緑江に沿って２キロほどの区間を占める奇妙な形の岩壁である。火山活動により形成されたものだとされている。

千軍岩の形態はあたかも1000余の兵士たちが整列しているような趣である。

火山活動に加え、その後の流水の浸食作用により形づくられた千軍岩は、高さが平均数十メートル、厚さは20～30メートルである。

この岩壁は特殊な地質と地形学的現象についての研究対象であり、その刃のように鋭い岩峰の列や表面を削って立てた



千　軍　岩

かのような絶壁が続いている。千軍岩は鴨緑江渓谷の風致で異彩を放っている。

ひと所で同時に味わえる四季

世界には季節の別のない国もあれば、四季の区別が明確な国もある。

毎年変わることなく訪れては過ぎ去る四季の別がある故に、自然や地理的環境は多様に変化し、季節それぞれの特色ある風致が人々を楽しませるのである。

このようにして人間は、限りなく続く四季の変化を経験し、春になれば万物が蘇り、新しい芽が生え、夏は緑が色濃くなり、秋には木の実や果実がたわわに実り、冬の訪れとともに雪が降り、山河が凍りつくことを知るようになった。

ところが、自然のこの法則を覆す独特な現象がここ白頭山で見られるのである。もちろん、白頭山にも年々四季がそれぞれに訪れる。けれども白頭山では同じ所で、同時に四季別々の現象を見ることが出来るのである。

白頭山ではこの特異な現象がどこか特別な所だけではなく、白頭山の全般にわたって見られる。それは噴火口の中でも、山あいの渓谷でも、また春、夏、秋、冬にかかわりなく年中見られる特異な現象である。

夏、白頭山の上から四方を見渡すと、青々とした大樹林が風にそよぎ、草原にはとりどりの花の海が広がる夏の景色を見せ

ているが、高山の草原にはクロマメの木が黒く熟れた実を枝ごとに付け、それらが一粒二粒と地面に落ちて秋の風景をかもしており、深い谷には雪が積もって冬の景色を呈している。日陰の斜面には生えて間もない植物が春を謳歌している。

一方、天池の岸辺に目を向けると、岩の裂け目に根を下ろして咲いた花が実を作ろうとしている晩夏であるが、つい先まで降っていた雨がにわかにこぶし程ものあられとなって地面を叩きもする。これは秋に起きる現象である。ところが、一方では雨のしずくに濡れた花のつぼみが陽光を受けて頭をもたげている時、他方では昼間に丈を超える雪が積もっているのだから、間違いのない冬である。

また、噴火口内の谷間をのぞくと、高みに咲いていた花がしおれはじめ、青い葉は黄色く変わり秋の風景を広げるが、深い谷には大きな湿った雪のかたまりが処々に見られるので明らかな冬である。にもかかわらず、それらの雪のかたわらにはなんと初春の草本植物が芽を出しているかと思うと、そこから少し離れた所では、まだつぼみを開いていない植物がわれもわれもと競って育っているのだからそれは夏景色である。

白頭山では夏に四季の基本的な特徴が見られるだけではなく、冬季も夏特有の現象を見ることが出来る。

冬が訪れ年末になると、天池は氷に覆われ、その上に雪が積もり、寒風が小止みなく吹きすさぶ。

ところが、深い地底から熱い水が湧き出る温泉の一帯は神

秘境を現出する。

　天池が生まれて長い歳月が流れたが、その間一度として凍ることのなかった温泉では、澄み切った水が休みなく熱くたぎり、かげろうのような湯気が立って、春のような気分にひたらせる。湖の岸辺の空気は肌を切るかと思えるほど冷たいが、温

泉では素っ裸で水中に飛び込んで汗を流すのであるから、蒸し暑い夏のようであり、温泉の近くの日当たりの良い湖畔には霜に当たっていない草があって秋の情趣が味わえるのである。

　このように白頭山は、ひと所で四季を同時に味わえる名山である。





朝鮮の聖山

編　集：尹英日、朴成日

翻　訳：金時習

発　行：朝鮮民主主義人民共和国
外国文出版社

発行日：チュチェ110(2021)年10月

E-mail：flph@star-co.net.kp
http://www.korean-books.com.kp



ISBN 978-9946-0-2094-5